

氏 名 松 村 薫 子

学位（専攻分野） 博士(学術)

学 位 記 番 号 総研大甲第735号

学位授与の日付 平成16年3月24日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻

学位規則第4条第1項該当

学 位 論 文 題 目 糞掃衣の研究－福田会の事例を中心に－

論 文 審 査 委 員 主 査 教授 早川 聞多
教授 小松 和彦
助教授 栗山 茂久
名誉教授 佐々木 宏幹（駒澤大学）
学長 頼富 本宏（種智院大学）

本論文は、日本で「糞掃衣」という仏教の僧侶が着る特殊な宗教服から、その特別性がいかなる理由から発生しているのかについて考察するものである。具体的には、福田会という、袈裟をつくる集団を実地調査し、その団体において特別な衣服とされる糞掃衣を、製作活動、それを支える言説（理念）とその歴史的展開その他から、なぜその集団において糞掃衣が特別な衣服とされているのかについて考察した。これまで宗教服研究は、宗教者の心構えを肅正する目的の研究が多かったため、特殊な研究とみなされてきた。しかし、宗教服研究からも、一般の人々の価値観につながる研究成果を挙げられるはずである。そこで、論者は、布に付与される意味や製作に携わる人々が付与する意味に視点を当てて考察を行った。

第一章「福田会における糞掃衣制作活動」では、福田会という袈裟を縫う団体の実態とそこで縫われる糞掃衣の製作について、フィールド調査をもとに明らかにした。福田会では、仏教経典で定められるとおりの袈裟、〈如法衣〉を製作している。如法衣の中で最上とされるのが糞掃衣である。糞掃衣の製作は、不要になった古い着物や帯などを集め、裁断し、各部分ごとに分け、何人かの人で刺子縫いをし、最後に一枚に縫い合わせる。糞掃衣は、福田会で特別な袈裟として認識され、尊重されている。

第二章「糞掃衣の理念の歴史（一）～インド・経典分析を中心に～」では、糞掃衣の特別性の根拠となる経典を考察した。糞掃衣の語源は、塵芥にまみれたもの、などの意味がある。糞掃衣の裂は、インドにおいて呪力が発生すると考えられていたり、不浄、境界という意味を持つ裂である。そうした裂を用いて、僧侶自ら作るのが経典で定めるところの糞掃衣である。

第三章「糞掃衣の理念の歴史（二）～日本的展開～」では、経典と同様に糞掃衣の特別性の根拠となる道元、慈雲、沢木といった僧侶の言説を考察した。道元は、糞掃衣を大変重視し、「最も清浄な衣」と位置づけた。そして、日本で経典の記述にある裂を得るのが難しいと考え、布施する人の浄なる心に価値を見だし、浄なる心がともなう布を糞掃衣の布として認めるとした。このような考え方は、江戸時代に活躍した慈雲や、明治時代の曹洞宗僧侶沢木興道も同様である。日本では、浄なる心を裂に読み込み、それを糞掃衣の衣材として認めているのである。ここまでの考察により、福田会で製作される糞掃衣と、経典に定められる糞掃衣や道元の言説との間に差異があるということが明らかとなった。そこで、第四章「糞掃衣の聖性はどこからくるのか」では、実際の糞掃衣製作において聖性が発生する要素は何かという点についての考察を行った。福田会では、経典どおりにつくることが前提としながら、実際は経典や道元の言説に定められる通りの糞掃衣をつくっているわけではない。しかし、福田会の人々は、自分たちの作っている糞掃衣は、経典や道元の言説にある糞掃衣と同様であるという認識をもっている。そうであれば糞掃衣の特別性の発生は、経典や道元などの言説以外にあるということになる。そこで、福田会の糞掃衣の特別性の発生要因として考えられる諸要素を分析した。

本論での考察の結果、福田会の糞掃衣の特別性は、複合的な要因が重層的に組み合わさった中に発生していることが明らかとなった。福田会の人々は、糞掃衣を、インドの釈尊以来伝統的に続いてきているもの、という連続性の点から信仰している。そして自分たち

のつくっている糞掃衣は、経典記述にある糞掃衣と同一のものと考えている。しかし、思想的には連続性が見られるものの、糞掃衣の製作自体には連続性はみられない。福田会では、経典記述通りの如法衣をつくるという立場に立ちながら、経典記述と異なる糞掃衣をつくっているのである。

経典記述によれば、糞掃衣の裂は、僧侶自ら拾ってつくっていた。檀家から布施してもらった裂でつくる袈裟は、糞掃衣ではないとされていた。糞掃衣は、誰のものかわからない無所有の裂でつくる場所に重きが置かれていた。そして、修行のために身につけるため、呪力のある不浄性、境界性のある裂を用いる点に特別性があったのである。

ところが、日本の糞掃衣は、道元が、裂を「清浄な心」に転換した。これは大きな変革であり、その結果、日本的な展開が始まることとなった。日本では、それ以降、糞掃衣は、檀家の「清浄な心」のもと布施された古い着物を集めることとなった。その集められた着物には、布施した人々の「心」がこめられていると考えられている。裂を集めることは、モノと心を二重に集めている行為なのである。そして福田会に人々が集まり、糞掃衣の田相部分を各人が担当する。人々は、刺子して縫うという行為により、田相に心を込めたと考える。そしてそれぞれのつくった田相を集め、つなぎ合わせて一領の糞掃衣に仕立てる。全ての田相が一つになり、糞掃衣が完成するとそれは、「みんなの心が寄せ集まったもの」と認識される。糞掃衣は、裂、縫うという労力、人、そして心を、一つに寄せ集めた象徴なのである。そこに福田会の糞掃衣の特別性がある。

糞掃衣の聖性の発生は、裂を寄せ集める、縫うという労力を寄せ集める、心を寄せ集める、人を寄せ集めるといった〈寄せ集める〉点に特徴がある。それによって一つの糞掃衣が形作られるのである。論者が本論文の考察から特に主張したいのは、福田会の糞掃衣の特別性は、〈寄せ集める〉と「特別な力」すなわち「呪力」や「聖性」が生まれる、いう信仰が根底にみられるのではないかということである。道元の裂の転換にも影響され、福田会の糞掃衣は、心を寄せ集めるという意味が強い。だからこそ日本の糞掃衣が成立するのである。

この考察の結果は、糞掃衣にとどまらず、それを越えた問題にもつながっているように思われる。すなわち、論者は、福田会の糞掃衣が、経典記述と異なるにも関わらず、聖性のある衣として成立しうる理由として、糞掃衣の製作にとどまることなく、日本において広く見出される、〈寄せ集める〉という考え方がその根底にあるからではないかと推測している。例えば、布を寄せ集めてつくるという糞掃衣製作の仕方は、戦争の際に弾よけになったという「千人針」や病気に快癒などの願いを寄せた「千羽鶴」といった習俗を想起させるであろう。つまり、この〈寄せ集める〉という特徴は、糞掃衣を越えた日本の民間信仰、モノの作り方、集団の作り方などに関わる問題であると考えられるのである。

「糞掃衣」とは、釈迦が着ていたとされる仏教僧侶の衣服（袈裟の一種）で、一部の僧や信者たちからは仏像にも等しい僧服とみなされている。現在の日本では、「福田会」と称する信者中心の団体でのみ製作されている。本論文は、この福田会でフィールドワークを行い、そこで得た資料を中核にすえながら、宗教民俗学や被服学、仏教学などの研究成果を駆使して多角的・総合的視野からアプローチすることで、日本の糞掃衣の特徴すなわちその「聖性」の発現の理由を日本文化の脈絡のなかに位置づけながら考察したものである。第一章では、糞掃衣を製作している愛知県の福田会の現地調査に基づいて、現代の糞掃衣製作の実態とそこに集う人々の糞掃衣に対する考え方について述べ、福田会という団体の具体的な活動内容や、彼らが製作する袈裟のなかでも糞掃衣は信仰対象とされている特別な服であることを明らかにするとともに、仏教経典に記述が見られることや道元・慈雲・沢木興道といった高僧が糞掃衣の重要性を説いたことに尊重理由を求めていることを明らかにしている。第二章と第三章では、経典に記述されている糞掃衣の性格と、日本で糞掃衣の重要性を説いた道元や慈雲、沢木興道の言説の分析を行うとともに、現在の糞掃衣に至る歴史を展望することで、日本では糞掃衣の意義づけや製作方法等に大きな変化が生じていたことを考察している。すなわち、経典における糞掃衣は、修行のために身につけるものであって、僧自らが裂を拾ってきて作り、しかもその裂は宗教的・象徴的な意味で「不浄なあるいは危険な裂」とされていた。しかし、道元が「糞掃衣」の重要性を発見したとき、糞掃衣は信者から贈られた裂から作り、裂に「清浄な心」を見出す等の大きな性格の変換がなされ、それが糞掃衣の日本的展開の契機となったとする。さらに道元の糞掃衣についての志を復興しようとした江戸時代の慈雲らは、信者たちの持ち寄った裂を継ぎ合わせた服へと変化させ、それが現在の糞掃衣の製作の基本形となったと指摘している。この指摘は本論文の中でも高く評価できる部分である。本論文でもっとも興味深い考察がなされているのは第四章で、第三章までの考察を踏まえ、福田会の人々が実際に作っている糞掃衣は経典に記述されたものとは大きく異なっている点に着目することで、糞掃衣に「聖性」を見出しているのは、単に経典通りの糞掃衣を製作しているという同一性への信念だけではなく、福田会という団体における糞掃衣の製作過程それ自体のなかにも理由があることを分析している。すなわち、裂を寄せ集める、人を寄せ集める、縫う労力を寄せ集める、心を寄せ集めるといった、〈寄せ集める〉ことによって特別な力つまり「聖性」が発生すると分析し、それは「千人針」や「千羽鶴」の習俗などにも通じるとする考察は、説得的である。

このように、本論文は、現代の糞掃衣の「聖性」の発現の理由を学際的視点から丹念に分析し、特殊な宗教服研究という枠に閉じ込められていた従来の研究を大きく踏み越えた、示唆富んだ内容の論文として高く評価できる。なお、審査委員から、完成度の高い論文ではあるが、インドの経典の理解や道元・慈雲の言説の理解にはなお考察を深める余地があることや金襴袈裟と対比的に考察してみる必要もあること、本論

文では福田会の思想と実践の考察に集中したが、今後は他の仏教徒が福田会をどう見ているのかといった視点からの検討を期待する等の指摘があった。

以上のような審査の結果、審査委員会は、本論文を博士の学位に十分に値すると判断した。